

木育のオモテ 1月29日(土)

## 第1部 次世代に向けた人材育成

コーディネーター： 古川 泰司 (アトリエフルカワ一級建築士事務所)  
浅田 茂裕 (埼玉大学 教授)

出演： 西川 貴章 (有限会社丸大製材所 代表取締役)  
田淵 優 (丸紅木材株式会社 IKONIH 事業部)

コメンテーター： 伊藤 道男 (ちば里山センター 副理事長)

「木育空間デザイン虎の穴」とは2021年9月~12月にかけて開催された木育空間デザインを学ぶためのオンライン講座。この講座の修了生に、今回の取り組みで考えたことなどをお話いただき、デザインという活動から、木育を考えるディスカッションを行った。



### デザインとは何か、これから木育をデザインしていくためには

浅田 デザインとは形を決めるだけではない。企画する、どんな材料を選ぶか、成果をもたらすか、そういったことまでおおらかにデザインである。私たちはそれについて学ぶ講座を開講している。回を重ね、デザイン開発・製品開発までやる時期に来ている。「木育デザイン虎の穴」で、木育の企画や製品デザインや製品の流通について、保育や教育の現場のニーズについてなど様々ことを学んでいただいている。

今回は虎の穴の受講生からお話を聞く。あえてデザインとは接近した仕事をしていない人に登壇いただき、デザインとは何か、これから木育をデザインしていくにはどうしたらいいだろうか、ということを知りたいと思う。

**田淵** 輸入建材をメーカーに卸す会社。社では5年ほど前から国産材を使うアイコニーというブランドを立ち上げた。林地残材まで使う、そのためには小さな部材で作れる子供用家具やおもちゃなどを流通させること、ということでスタートした事業。地元の木を使った商品作りも行っている。ヒノキをメインに海外向け展開を行うため、ベトナムで作っている。学校での環境授業・木育授業の内容デザインを課題として行った。自分がやりたいことを相手に要求するだけでなく、先生側のことも考えて提案資料を作る、ということ。この授業を行うことで、こんなことが分かるという着地点を作ることに力を入れた。座学とモノづくりを入れたパッケージにした。子どもたちは、木がざらざらしているのを見がくだけできれいにできる、そんな当たり前のことも知らなかったりする。そういうことを広めていくことも大切と思う。

**西川** 製材業、建築請負業を営み、自分で5代目。本業の他にワークショップを年間30〜40件ほどやってきた。一般の方とふれあう機会がなかなかないので、気軽に来てもらい、木について知っていただく、そんな目的で木工房を開いた。木育もキーワードになる。でもどんなことをやればいいのかと悩んでいた時に講座を知った。正直「木育デザイン」の意味も分からず参加した。“変態”でいうとまだ白帯。自分はいま30歳で若手の部類に入るので、これからのために勉強をしたいと。製材所として木にふれてほしい、そこで課題ではいろいろな木を使った扇子を作った。木のそれぞれの違いを感じてもらおうということが大切だと思う。そして今まで子供を対象に木育を行ってきたが、木のことを教えるのには大人も関わってくる。なので木育は全世代に伝えていく、という方向性を考えるようになった。

**伊藤** 森林ボランティア活動を30年以上やってきた。創成期から黄金期、そして次世代への継承問題に至るまでを見てきた。思い立って70歳を越すというところで、デザインとは無縁だった自分がこの講座を受講してみた。新しいことにトライすることで得られるものが非常に大きいということを実感した。木育に関する基本的な知識、デザインとはどういうことかを学ぶことができた。森林ボランティアのこれからについて大きなヒントを得た。課題では「だいじゃくん」という地域の木を使ってできる遊具を考案した。自分の脳みそを絞り出す作業だった。最後は自分の感性、本質的なものがいやおうなしに出てくるような経験だった。一つのものを生み出すということはこういうことなんだと実感した。若い世代の課題はオリジナリティがあり、自分が思っていることをきちんと形にしていく、というのが素晴らしかった。

古川 西川さんは地域の製材所の中で木をどうしようか、田淵さんは流通を行う大きな会社。虎の穴の面白いところは、こういう色んな立場の人々がいろんな視点から議論を行うことができた。それが素晴らしかった。

## 次世代につなぐ。そのために必要なことは

西川 今、自分のところでは次世代につながった状態かなと。祖父の会社を自分が継いだところ。木を最後の最後まで使い切る。ものを大事にする考え方。どうやったら木を最後の最後まで使えるかを考える。そういう考えになったのは上の世代の姿を見ていたから。

田淵 自分が伝えてきたことが今の子どもたちが大人になった時に常識になってくれたらうれしいと思う。木を伐るのは悪じゃない、使うのは良いことだという感覚。

伊藤 里山活動のボランティアの高齢化が問題。荒れていた山を、気概を持って自分たちの力できれいにしていこうとしていた世代。いまはそこで何をやるか、森のようちえん、小さな林業、そういった目的のために環境をデザインしていく、そういう世代が次の森づくりを担っていくのだと思う。そういう世代を見守る、邪魔しないことが大切だと思う。今日聞いている皆さんに。できるだけとんがって生きていた方が面白い。ただし日本社会は同調圧力が非常に厳しいので、時にはさりと逃げて、時には思い切ってとんがってほしい。

古川 森林ボランティアを開拓されてきた伊藤さんの言葉はとても重い。そのことがじわじわと世間に浸透してきて、次世代では、木育にも通じると思うけど、世の中はいい方に行っているのではないかと思う。今日のこの虎の穴の参加の3人が世代を超えてつながっている。これが宝。それが特によかったことかと思う。

浅田 次の世代に木育という言葉を引き継ぎたくない。それが当たり前になってほしい。そんな時代を作ることが大事なんだろうなど。

第7回 2022年1月29日・30日

# 木育・森育楽会

## 開会式



浅田 茂裕 先生

ウッド・チェンジ

切って使って  
また植えて

木を使うことで  
地域も元気に!



木材利用課長  
小島 裕章 課長  
小学生のお子さん

## 趣旨説明

参加申込 250人

木を失う社会・木がかない社会

変態が地球を変える。

危れ意識をもった人達  
(専門用語!!)

## 第1部 次世代に向けた人材育成

木育デザイン虎の穴の説明(浅田より)



伊藤 道男 氏



アトリエフィルカワ  
古川 泰司 先生

- ・森林ボランティア歴30年(千葉県)
- ・次世代問題に74年当たっている。

- ・視点を換えようと虎の穴に参加。  
→新しいことにチャレンジすることの大切さ。  
木育の見方を改めて。

できるだけ  
しんがって、でも  
逃げる時はサウリ  
とにげて。

- ・頭からしぼり出すような体験。  
0から生み出すことのおもしろさを学んだ。
- ・森林ボランティアの若成記の人は今60・70代  
森づくりは市民でもできる! 仕組みをたて、森を整備して終りになる。

西川 貴章 さん 30代で  
岡山県ミマサカ市にて  
製材・リフォーム・新築業  
+30~40件のワークショップ  
2021年に木工体験のできる  
工房「  
」をオープン



木育って子供に向けてだけじゃないって  
いうのがショウゲキだった!  
・先代の祖母から会社を継いだ。木を使いきる精神  
も継いだ。



田淵 優 氏

大阪の丸紅木材(株)  
もともとはハウスメーカーに  
外材をおるしていた。

ブランド「アイコニー」: 国産材で子供向けに  
家具やおもちゃを。

林地残材の問題からスタート  
→これを有効活用して  
山元にきちんと還元したい。  
分止まり100%を目指す!!

アイコニー  
IKONIT  
反対から  
読むと  
I/キ

カーボンポジティブの考え。これが次の世代に  
(カーボンニュートラルより)

自分から子供頃は木は切っちゃたためた赤

Q.身のまわりの増えてきた  
「木育」について何か思いは?

「木育」は断片的にやっても伝えきれない。  
例えば「木を実際にさわってもらってあげてもらう」

「自分の工房で木のハン作り  
→もともとは子供向けだったのを大人にも  
関心を持ってもらおうと。」

次の世代は整備した次に  
何をやる?が重要に  
なってくる。

次の世代に  
「木育」の言葉を  
引きつがせたい!

第2部に出演された平田美紗子さんによるイラストレポート